





窯町C窯跡絵高麗土瓶 (個人蔵)

窯町D窯跡天目茶碗

歴史と文化財を知る見学会 歴史文化基本構想推進事業 瀬戸の魅力再発見 せと 下品野地区」

日時:平成29年7月8日(土)

見学コース: ①午前 10 時 00 分 ②午後1 時 30 分 下品野公民館集合

(予定時間) 10時05分 1時35分 全宝寺

10時35分 2時05分 津島社

Т

2時20分 五丁目観音堂 10時50分 11 時00分 2時30分 窯町C窯跡

11時35分 3時05分 下品野公民館到着・解散

Т

瀬戸市域の主な指定・登録文化財

やきもの生産 の変遷

今回見学する文化財とその関連年表

	古	5 世紀	
本地大塚古墳(西本地町2丁目)	墳	6 世紀	
宮地古墳(上之山町2丁目)	飛鳥	7世紀	須恵
	奈良	8 世紀	器・
広久手第 30 号窯跡 木造十一面観音菩薩立像(下半田川町)県 木造阿弥陀如来立像(下半田川町)県		9 世紀	灰釉
	平	10 世紀	陶
	安	11 世紀	器
		12 世紀	茶
古瀬戸瓶子(寺本町)	鎌倉	13 世紀	碗
陶製狛犬(深川町)国	南北朝	14 世紀	古編
瀬戸窯跡【小長曽窯跡】(東白坂町)国 永享年銘梵鐘 聖徳太子絵伝(塩草町)	室町	15 世紀	芦
定光寺本堂(定光寺町)国 織田信長制札(窯町) 菱野郷倉『大般若経』[一部鎌倉]	戦国 _{鈕・棚山}	16 世紀	大 製窯
瀬戸窯跡【瓶子窯跡】(凧山町)国源敬公廟(定光寺町)国 笠原村・両半田川村国境争論絵図(東松山町)石造地蔵菩薩立像(片草町)	江	17 世紀	連
	戸	18 世紀	製房品
陶質十六羅漢塑像(寺本町) 六角陶碑(藤四郎町)	(0024)	19 世紀	
旧山繁商店(仲切町・深川町)国登 瀬戸永泉協会礼拝堂建造(杉塚町)国登 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、 、	(明治) (田和)	20 世紀	

品野の長江 (永井) 民部と今村の松原広長が大槇山・安戸阪で合戦 →品野勢が勝利し松原広長戦死

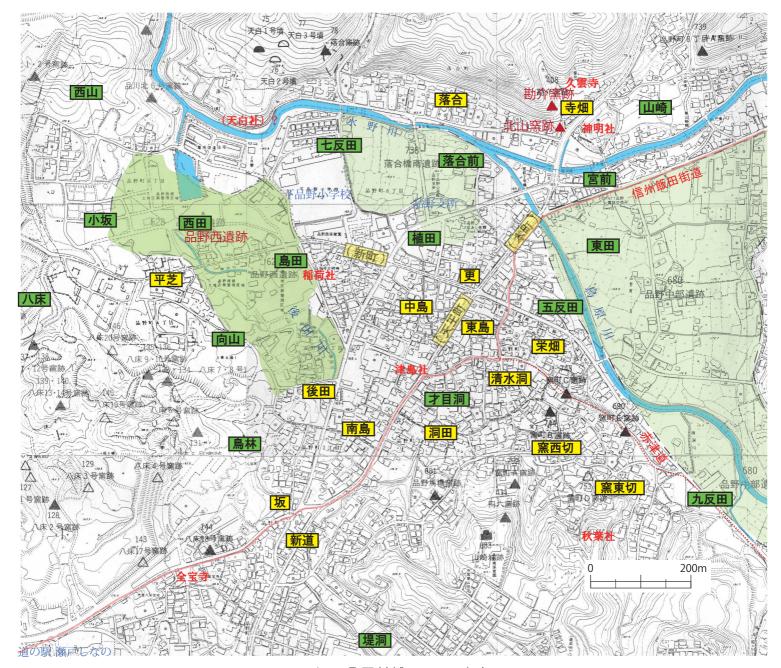
織田信長制札 (加藤新右衛門家伝世)

窯町C窯(新右衛門窯)開窯 窯町D窯(三右衛門窯)開窯

中島 (津島社南) の秋葉山常夜燈建造

山車を伴った祇園祭の開始 五丁目観音堂の木之本地蔵制作 祇園祭で神武天皇像が搭載されはじめる。

21 世紀



旧下品野村域のシマ・小字

(瀬戸市教育委員会 1997『瀬戸市詳細遺跡地図』に、瀬戸市 1930『瀬戸市現勢全図 市外品野町』のシマ (黄色)、『明治十五年愛知郡町村字名調』記載の小字 (2005『瀬戸市史 資料編 3 原始・古代・中世』所収)(緑色) を加筆して作成)

① 全宝寺

全宝寺は、当初は天台宗に属し、天平6(734)年創建とも伝えられています。享禄2(1529)年に三河の全久院の僧を招いて開山となし、阿弥陀如来を本尊としましたが、永禄3(1560)年に兵火によって堂宇を焼失したと伝えられています。文禄年中(1592~95)に雲興寺14世居雲宗準が堂宇を再興し中興開山となり曹洞宗の寺となりました。寛政4(1792)年等の村絵図には、「地蔵」と書き込まれています。



① -1 阿弥陀峰城跡· 大橇山古戦場(文明 14(1482)年)

品野を基盤とした桑下城主の長江(永井)民部は、文明14(1482)年に、今村を基盤とした今村城主の松原広長との合戦を行いました。長江氏らは阿弥陀峰に城塞を築き、松原氏らは今の效範小学校付近の勢呼山だ陣を築き、主戦場は、阿弥陀峰の西側の大槇山であったとされています。尾張から東濃に続く街道沿いで行われたこの合戦は、品野勢が今村勢を安戸坂まで追い落とし、現在の小金町付近での松原広長の戦死によって終結しました。

阿弥陀峰城は、武士の居城ではなく砦としての一時的な軍事拠点であったと考えられ、小高い全宝寺境内地がその故地と伝えられています。

1 -2 祇園堂

品野祇園祭の神武天皇像及び従者像【市指定】



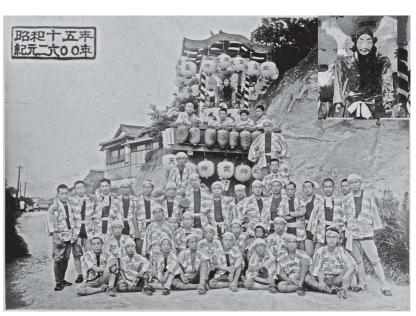
品野祇園祭の神武天皇像 (中央)及び従者像 (左右)

下品野では、毎年7月第3土曜日の夜半に1台の山車を中心として神輿や踊りの隊列が中心部を巡行する「品野祇園祭」が開催されます。祭り当日に全宝寺祇園堂に安置されている神武天皇像1体とその従者2体を品野陶磁器センターで待機する山車上層に献納(移動)し、神輿、万燈車等とともに品野1丁目・3丁目の坂上から国道248号線沿いを北上し津島社前を通り品野バス停(品野駅)まで踊り

と山車曳行を繰り返します。町内には赤白



昭和初期 (昭和 5(1930)年以降か)の 祗園祭山車画像 (全宝寺蔵)



昭和 15(1940) 年の祗園祭山車画像 (戸田幹夫氏蔵)

の丸提灯や角行燈が設置され、祭りを機会に里帰りする人も加わり、地区中の老若男 女が参加して大変賑わう祭りです。

品野祇園祭については、江戸時代の地誌や村絵図にも天王社・祇園社・津島社、祭りや山車に関する記述が皆無なため、品野津島社の始まりや山車を伴う祭礼は、遡っても江戸末期から明治初期の頃からと考えられます。

山車上層の中央に据えられる神武天皇像は、高さ 110cm、肩幅 32cmです。神武天皇像の左右には据えられる従者像は、口を開けた形相のもの(阿形)(高さ 78cm、肩幅 28cm)と、口を閉じた形相のもの(吽形)(高さ 79cm、肩幅 28cm)です。3 体ともに、頭部は木製で(先代頭部は石膏製(ともに市指定文化財))、両腕を上下に動かすことのできる素朴なからくり人形となっています。昭和 15 年の古写真(前頁右下)等により、先々代の神武天皇像は両手に日の丸旗を持ち、祭りの際に動かしていた状況がうかがわれますが、現在はからくり操作は行われていません。神武天皇像ほかについては、昭和 5 ~ 14 年に撮影された山車の写真(前頁左下)にはみられないことから、昭和 10 年前後から山車上層に据えられるようになったものと考えられます。



祗園祭 渡御の隊列 (神輿・万燈車・山車等)平成24年度



祇園祭山車と踊り(品野町6丁目付近)平成24年度

② 津島社

下品野中島 (現在の品野町 4 丁目) の火の見下に小規模な朱塗りの社が 3 棟みられます。その中央の社が津島社です。津島社は、天王社または天王さんともいいますが、下品野をはじめ瀬戸市域北東部では祇園社または祇園さんとも呼んでいます。周辺の

村と同様、津島市の津島牛頭天王(津島神社)の分霊を祀っています。品野祇園祭の際には、前日までに津島市の津島神社に代参して受けてきた御札がおさめられ、当日の午前に津島社の前で参加者が祈祷を受けます。

なお、津島社南に建てられている秋葉山 常夜燈は、寛政 7(1795) 年の銘があり、市 内で確認される最古の常夜燈です。



祇園祭開始時に行われる津島社での祈祷

③五丁目観音堂(東嶋観音堂)(明治 15(1882) 年~)

江戸時代後期に信州飯田街道沿いには、地蔵菩薩や馬頭観音などの石造物が多く みられたようですが、街道の要衝であり当時東屋玉屋の茶店があった傍らに明治 15(1882)年に合祀されたのが、この観音堂の始まりといわれています(平成6年観音堂再建寄付者芳名板より)。

堂の奥には地蔵菩薩・行者・儒者像が刻まれている明治 21 年造の「木之本地蔵」をはじめ、11 体の石造物が 2 列に並んでいます。全て表面には鮮やかな彩色が施されています。

品野祇園祭の山車は、現存する南部の1台のみならず、東部等のシマがもつ山車が 他に2台あったと伝えられており、それらが、この観音堂の前で集結したといいます。

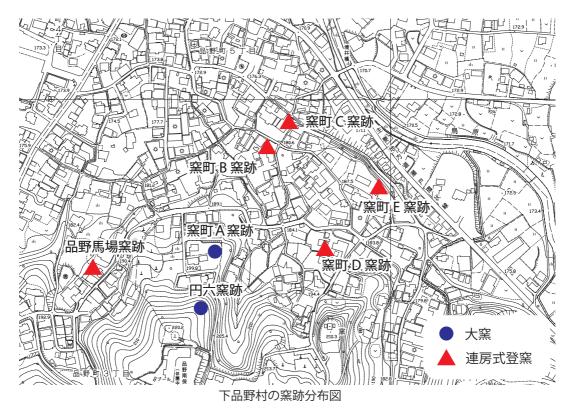




④近世下品野村の窯業生産(窯町窯跡群)

近世の下品野村は、江戸時代後期に尾張藩士によって著された地誌、『尾張衛行記』に「信州飯田街道筋ニアリ、カマ嶋・東島・中島・南島ト四区に分レリ、小百姓多ケレトモ上中品野ヨリモ村立ヨクミエタリ、中二ハ酒屋又ハ小商ヒナトスル者モアリ、戸口多クシテ佃力足り、他村へ掟田地ハナシ、土地ハマツチニテ土地ヨシ、又此村ハ先年ヨリ馬継所ニ立、信州アタリヨリ来レル荷物ヲ名古屋へ著送レリ・・・」とあるように、農業生産主体の村であり、かつ信州飯田街道沿いの馬継所としても発展していました。また、現在の瀬戸市窯町地内には、江戸時代の連房式登窯が集中して確認されており、現在まで連綿と窯業生産が続けられたことも知られています。

そもそも下品野村では、戦国時代に大窯である円六窯が稼働していましたが(15世紀末葉~16世紀前葉)、その後しばらく窯が築かれることはなく、瀬戸窯全体をみても、かつて「瀬戸山離散」や「瀬戸窯暗黒時代」と呼ばれたように、戦国時代末期から安土桃山時代にかけて窯業を行った痕跡が全くみられなくなります。これは、近年の研究では織田信長の美濃への進出に伴い、瀬戸の陶工が国境を越えて美濃窯へと窯業生産を展開した、いわゆる「瀬戸窯大発展時代」と解釈されていますが、いずれにしてもその後、下品野村や赤津村では江戸時代初期に窯業生産が再開されます。



下品野村における近世窯業は、尾張徳川家が、慶長 15 (1610) 年、美濃国水上村(岐阜県瑞浪市)から新右衛門・三右衛門兄弟を召還し、保護を加えたことが始まりとされています。元々新右衛門の出身は旧瀬戸村でしたが、召還される際に瀬戸村や赤津村、下品野村のどこを選んでもよいといわれたようです。その中で旧地ではなく、下品野村を新天地として選んだ理由は、当時品野には陶器を生産するための原材料(陶土・釉薬)や燃料となる薪に事欠かないからとされていますが(『陶器伝来記』より)、元々新右衛門らの父(もしくは叔父)は瀬戸村(洞地区、瀬戸公園付近)に居住していたものの、信長の発給状を得、保護を受けたため同村の窯人から妬みを受けたことから新天地を求めざるをえなかったという柵も影響したようです。下品野に移り住んだ新右衛門らは、五町五反歩(約55,000㎡)を永代除地として保障され、諸役を免祖されました。与えられた除地は新右衛門・三右衛門家で二分され、さらに後世には分家に配分されています。

さて、下品野村で開窯した新右衛門家は三代まで尾張藩が使用する什器類の御用を勤めました。当初、兄弟・郎党で力を合わせて屋敷や窯を築きますが、最初に築いた窯は戦国期以来の「大窯」で、現在確認されている「窯町A窯跡」がそれにあたると考えられています。その後まもなく、新たに「連房式登窯」の技術が伝わると、北側の丘陵麓に窯を移しますが、それが「窯町C窯跡」といわれています。この段階では新右衛門、三右衛門



志野丸皿(窯町A窯:17世紀初頭)





左 天目茶碗 右 掛け分け丸碗 (窯町 C 窯: 17 世紀前葉)

兄弟は共に同じ窯で生産を行ったと考えられますが、後の明治 44 年刊行の『愛知県実業宝鑑』には「新右衛門ハ郷ノ西部ニ 陶器ヲ築キシカバ西窯ト称シ、三右衛門ハ南部山ノ洞ニ窯ヲ築 キケレバ洞窯ト称シ・・・」といった記述がみられることから、ある時期を境に新右衛門の「西窯」と三右衛門の「洞窯」に分立していたようで、その時期は「南部」の「山の洞」に築かれ、三右衛門の窯といわれている「窯町D窯跡」の出土遺物から 17 世紀後半であったと考えられています。なお、考古学的にはこの 17 世紀の中でも、中葉に位置付けられる資料が希



薄であることから、彼らの窯業生産が一時期停滞していたので 鉄釉徳利 (窯町D窯: 17世紀後葉) はないかともいわれています。

◎信長の制札

下の写真は、永禄 6 (1563) 年、今村の市に立てられたとされる織田信長の制札です。信長が瀬戸の窯業を含めた商工業を保護するため、商人の往来や商業取引を取り決めたもので、瀬戸焼が信長にとって領国内の商業振興に欠かせないものであったことを物語っています。この制札は代々加藤新右衛門家に伝えられていることから、新右衛門家が瀬戸焼生産ばかりでなく、その販売に関しても一定の権限を有していたと考えられています。



織田信長制札(永禄6(1563)年)(加藤新右衛門家蔵)【市指定】

制 配 瀬戸 一、瀬戸物之事、諸郷商人 三、当郷出合之白俵物并塩 一、当郷出合之白俵物并塩 一、当郷出合之白俵物并塩 一、新儀諸役、郷質・所質 一、新儀諸役、郷質・所質 不可取之事 右条々違犯之輩在之者、速 可加成敗者也、仍下知如件



今後のスケジュール

<7月>

せと歴! 定光寺こけら葺替え工事現地見学会 II

日時:7月29日(土) 午前10時~午後3時

内容:新しく葺替えられたこけら屋根を工事用足場から見学できます。

参加費:無料

※申し込みは不要です。直接現地へおいでください。見学者多数の場合はお待ちいただ

く場合もあります。



定光寺本堂 こけら葺替え工事の様子

瀬戸市歴史文化基本構想ホームページ

昨年度、策定した瀬戸市歴史文化基本構想や基本構想に関連した取り組みを ホームページにて掲載しています。

これまでに開催した「まちめぐり」や「学び塾」の様子を紹介するとともに、 「まちめぐり」の資料をダウンロードすることができます。

アドレス:http://seto-cul.jp/rekibun/

ぜひ、ご覧ください。